

シチュエーション2…自宅で妹と……

想像してみてください。あなたは大学生の男の子です。あなたは今、自宅のリビングでテレビを眺めています。今日は平日でしたが、履修の日程上大学の講義がなく、また、バイトのシフトもありませんでした。なので、平穩な休日を自宅でゆっくりと過ごしているのです。日々の疲労を癒やします。誰に邪魔されることもなく。

ふと、小腹の空いたあなたは冷蔵庫に向かいました。冷蔵庫の中には、なんと大好物のプリンが殿様顔で鎮座していました。ラッキー、とばかりにあなたはそれに手を伸ばします。あなたはソファに座りながらプリンを食します。口に入れた瞬間、とろけてしまうような甘みが口全体に広がり、顎がふるふる震えました。ああ、このプリンはなんと美味なのでしょう。あなたはこの甘味に舌鼓を打ちつつ、録画したドラマを見ます。まさに、絵に描いたような休日です。あなたは幸せくと顔を綻ばせます。

すると――

「ただいまあ〜〜〜」という女の子の声が聞こえてきました。

あなたには○学生の妹がいました。名前は嵐山 久留里（あらしやま くるり）。寝癖のようなツイントールをびよこびよこ揺らす、可愛らしい女の子です。お餅のようなぷにぷにほっぺに、丸くてパッチリしたくりくりお目々。体の発達は著しく遅いようで、小学生と間違えられるような幼児体型をしています。幼女性愛者にはたまらない容姿だと言えるでしょう。

そんな彼女にあなたは頭が上がりません。あなたの妹はサド気質の強い女の子で、喧嘩になると徹底的にあなたをやっつけてしまうのです。口喧嘩では全く勝てないし、だからといって年の離れた妹に手を出すわけにはいきません。あなたは妹にたじたじなのです。

だから、久留里が帰宅したことに気づいたあなたはちよつと嫌な表情を浮かべます。あなたの平穩が大騒動に変貌する可能性が憂慮されるからです。

「ただいま〜……って、うげっ、お兄ちゃんいたのかよ……」

久留里は露骨に嫌な顔をします。どうやら、彼女もあなたと同じようなことを考えていたようです。

「まっ、いいや。今日の私は機嫌がいいのさ。ふっふっふふっふん」
久留里は鼻歌を奏でながら台所に向かい、冷蔵庫を開きました。

「……………」

彼女はそのまま静止し、その後冷蔵庫の扉を閉めました。

その瞬間、あなたはとてつもない寒気を覚えました。部屋の温度が一気に低下したように感じたのです。まるで、裸の状態で南極の海に沈められたかのようにでした。あなたは自らを抱きしめ、体を震わせま

す。
「ねえ…………お兄ちゃん…………？」

久留里は亡者のような足取りであなたの前に姿を現します。その可愛らしい顔は般若のように歪んでいました。明らかにただごとではありません。あなたは唾を飲み込んで身構えます。

「それ…………そのプリンさあ…………私のんだけど…………どうしてお兄ちゃんが食べてるの……………」

久留里はあなたの持つている、すでに八割方を胃の中に流し込んでしまったプリンを指差します。そう、今しがたあなたが咀嚼していたプリンは、久留里が楽しみにしていたプリンだったのです。学校で涎を垂らすほどに楽しみにしていたプリンだったのです。あなたは妹の大切なデザートを断りもなく篡奪してしまったのです。なんと無情な所業でしょうか。確かに、プリンにそれらしい目印を付けていなかった久留里にも落ち度はあるのですが、それを加味しても、そのプリンを食してしまった以上、裁かれるべきなのはあなたです。そして、あなたの手札に免罪符はありませんでした。

あなたは即座に久留里に謝罪します。そして、手に持っていたプリンを彼女に返却しました。

しかし、当然ながらその程度で彼女の怒りが治まるはずもありませんでした。

「…………なに？ お兄ちゃんはその食べかけのプリンで我慢しろってえの？ へえ、随分と都合のいい考えだね」

あなたは必死に久留里に謝ります。今度、お返しに同じプリンをたくさん買ってあげることも約束します。

しかし、まだまだ彼女の怒りは治まりません。むしろ、さらなる逆鱗に触れてしまったようです。

「お兄ちゃん…………なにか勘違いしてない？ 私は食べかけなんかじゃ

なくて、ちゃんと封のされたプリンを、今、この瞬間に食べたいの。分かる？ 今よ、今。いゝま！ 一週間後なんてもつての他だし、一日後つてもあり得ないし、数分後でも我慢できないの。今食べたいの。今じゃなきや嫌なの。……ねえお兄ちゃん、久留里はどうしたらいいかなあ？ お兄ちゃんにプリンを食べられちゃった久留里はどうしたらいいかなあ？ お兄ちゃんはとうしたらいいと思う？ どうしたらお兄ちゃんの食べたプリンを再生させることができると思う？ 教えてよ。大学行って、頭もいいんでしよう？ 大学で培った知識でこの問題を解決してよ」

久留里はねちっこくあなたを虐めます。あなたは何を言い返すこともできずに閉口します。

「……ふふっ、そうだよねえ。無理だよねえ。プリンを元に戻すことなんてできないよね。だって私のプリンはお兄ちゃんの歯でぐちゃぐちゃになっちゃったもんね。もうお兄ちゃんのお腹の中でドロドロになってるもんね。もうどうしようもないよねえ。あはっ、あははははっ。……これは、お仕置きだね。お兄ちゃん」

久留里は妖しく目を光らせました。あなたの中のガゼルは鋭敏にその危険を察知し、反射的な速度でああなたの体を躍動させました。あなたは自室での籠城戦に持ち込むために、久留里の横を通り抜けようとしています。しかし――

「おっと！ 逃がさないよ！」

久留里は華麗なタックルを決めると、あなたを押し倒します。そして、流れるような動作でマウントポジションをとりました。あなたのお腹の上に乗し、身動きを封じます。なんとということでしょうか。あろうことか、あなたは○学生の女の子に体の主導権を奪われてしまったのです。成人間際の男性とは思えぬ情けなさです。

「へへ〜ん。お兄ちゃんよっわあ〜〜。か弱い女の子に倒されちゃったねえ。恥ずかしい〜〜」

にやにやと笑いながら久留里はあなたを見下します。あなたは顔を真っ赤にしながら抵抗します。この状況を打破すべく右に左に体を動かします。

「あっ！ こらっ。あばれるなあ〜〜。も〜。こうなったら……」

久留里は素早く手元の学生バックに手を伸ばします。そして、ある

物を取り出すと、それをあなたの鼻に押し当てました。

その瞬間、あなたの鼻は凄まじい悪臭を受容しました。汗の臭いが何十倍にも凝縮されたような、酸っぱい酸っぱい臭いです。それに埃っぽい臭いが混ざり、最悪の化学反応を示しています。瞬く間に全身から力が抜け、あなたは抵抗することを断念せざるを得なくなりました。

あなたの鼻に押し当てられたもの、それは——久留里の上履きでした。

「へっへっへっ、どうかな？ 私の上履きの香りは。お兄ちゃんも運が悪いねえ。たまたま、ちよっとした気まぐれで上履きを持ち帰ったその日に、私を怒らせちゃうなんて。その上履き、どれくらい洗ってないか知ってる？ 一年だよ。一年！ 一年間、ずっと洗ってなかったんだ。酸っぱくてえ、くっさあくっさいでしょ？ ほらほら、もつと嗅いでいいんだよ。妹のくっさい上履きで悶絶しちやいなさい？」

久留里はぐりぐりと上履きをさらに押し付けます。彼女の上履きは汗で湿っており、その湿度はあなたに不快感を与えます。しかし、その程度は微々たる問題に過ぎませんでした。あなたにとって大きな障壁となっているのは、なんといてもその上履きの臭気です。鼻を鳴らす度に、凶悪なまでの激臭が襲います。可愛い女の子上履きの臭いとは思えません。あなたは目を白黒させながら、その臭いにひたすら耐えます。意識はすでに朦朧としていました。

「うっわあり、効果バツグンじゃん。全然、動かなくなっちゃったよ。ねえねえお兄ちゃん、私の上履きそんなにクサイ？ もがくことでもできなくなっちゃうくらいクサイの？ ねえねえ答えてよ！ ねえねえ！」

久留里は上履きを押し当てながらあなたの体を揺さぶります。あなたは残りの力を振り絞り、久留里の上履きの臭いがキツすぎるといふ旨を伝えます。合わせて、こんなことはもう止めるようにと彼女を諭します。

「えっへっ？ だって、お兄ちゃんがプリンを食べたのがいけないんじゃない。ぜえっへっへっ、お兄ちゃんが悪いんだよ？ これは当然の罰なの。分かる？」

あなたは必死に久留里に謝ります。プライドも意地も投げ捨て、あなたはあなたの妹に謝罪します。この上ない屈辱でしたが、仕方ありません。このまま蹂躪されるくらいならば、兄としての矜持など安い

ものです。あなたは兄としての尊厳よりも身の保身を選択しました。あなたは上履きによる臭い責めを止めるように懇願します。

「ううううん、そんなに言われちゃあ……しょうがないかなあ。……うん、いいよ。分かった。止めてあげる」

久留里はそう言うのと、あなたの鼻を上履きから解放しました。すぐさま、あなたは室内の新鮮な空気を吸引します。何度も何度も深呼吸を繰り返し、鼻の中の激臭を放逐するように努めます。あなたはこの空気の尊さを噛みしめます。普段、何気なく呼吸をしているこの空気も、この時ばかりは楽園の空気のように感じました。彼はようやく訪れた平穩に感謝しつつ、深呼吸を繰り返します。

しかし、それは東の間の安寧に過ぎないのでした。

「はい、どおしくん」

久留里の声と共に、あなたの視界は真っ黒に染まりました。あなたは何が起きたのかと慌てふためきます。そして、間もなく理解しました。自分の顔を塞ぐ黒い布、それは彼女の汚れた靴下でした。

「上履きがダメなら仕方ないよね。私の靴下でお仕置きしてあげる。どう？ 私の靴下。今日は体育があったから蒸れ蒸れだよおしくん」

久留里は足を上下に動かし、あなたの顔を舐っていきます。再び、強烈な臭いがあなたを襲います。上履きの澱んだ臭いとはまた違った、新鮮な汗の臭い。だからといって、上履きよりまだマシだというわけではありません。今日一日分の汗がたっぷりと濃縮されていて、鼻を突き刺すような納豆臭が放たれているのです。彼女の汗や垢が溜まりに溜まったことで、そこが細菌の温床となった結果、納豆にも似た激臭が生成されてしまったでしょう。それは上履きの臭いよりもさらに強い悪臭で、あなたはブラックアウト寸前となります。歪みに歪む世界の中、あなたは必死に意識を繋ぎ止めます。このまま失神しては、あまりに情けないからです。

「ほれほれ、久留里の足臭攻撃だあ。どうだ、クサイだろ。私って新陳代謝が抜群だから、メッチャ汗かいちゃうんだよね。特に足の裏の汗がスゴいわけ。だから、私の足、すっごくクサイんだあ。私は別に嫌いじゃないんだけどね。やっぱり他人からしたら、強烈な臭いなんだろね。にひひひひ」

久留里は楽しそうに笑いながら、あなたを足蹴にします。ぐりぐりぐりぐり、とあなたの顔を足汗塗れにしていきます。その運動により

彼女の足はさらに発汗し、より濃厚な足臭を放つようになり、上
手く口を塞がれてしまったため、あなたは鼻で呼吸せざるを得ま
せん。あなたはその臭いを嗅ぎます。あなたはその臭いを吸います。
臭くて臭くて堪りません。にもかかわらず、あなたは抵抗することが
できません。激臭によりあなたの体は完全に脱力しており、残された
のはその意識だけでした。あなたはとてつもない屈辱を感じます。こ
れ以上ないほどの屈辱です。

「どうお？ この爪先辺りなんて、香ばしくていい臭いだよ。私
ね、ここの臭い大好きなんだよね。すっごいクサくてさ、何度も何度
も嗅いじゃうの。えへへ、お兄ちゃんにも嗅がせてあげるねっ」

久留里は爪先をあなたの鼻にぐりぐりと押し当てます。そこは彼女
の汗や垢が重点的に溜まっている部分です。当然、他の部位よりもさ
らに凄まじい臭いを放っています。吐き気を催すほどのいやな臭い
です。あなたはその臭いに悶絶します。四肢を痙攣させながら、白目
を剥いてしまいます。

しかし、この時点ですでに、あなたの体に異変が起きていました。
これだけ臭い思いをしているのに、これだけ苦しい思いをしているの
に、体の底が熱くなってくるのです。どうしようもなく、こみ上げて
くるものがあつたのです。自らの妹に虐められるという屈辱に、反抗
することすらできないという悔しさに、あなたは興奮を抑えることが
できません。あなたの股間は見ると見ると隆起し、高く高くそそり立
ちました。あなたは妹の靴下の臭いを嗅ぎながら勃起してしまつたの
です。あなたは勃起したペニスを元に戻そうと尽力しますが、性的興
奮を抑えることはできません。あなたは久留里に自分の勃起がバレな
いことを祈るばかりでした。

「ふんふんふん……ん？」

お腹に乗った久留里はふと後ろを向き、首を傾げました。冷や汗が
背中に滲みます。

「ね、お兄ちゃん」

久留里は氷の刃のような視線であなたを睨みます。

「どうしてさあ、チンチンおっ立ててるのかなあ。ねえ、どうして？
苦しいんじゃないの？ クサいんじゃないの？ お兄ちゃん、どうし
てかな？ なんて勃起しちゃってるのかな？？」

久留里はズボンから盛り上がった部分をツンツンと突きます。その

度に痺れるような快樂があなたを席卷します。あなたは体を震わせながら悶えます。もはや言い訳のしようがありません。あなたは実の妹の臭いに興奮しているのです。

「ねえ、ちゃんと答えてよ。私の質問に答えて？ ほら、足どかしてあげるからさ。なんでお兄ちゃんが勃起してるのかを答えてよ」

久留里はあなたの顔から靴下を離し、顔を寄せました。彼女の顔があなたの視界一杯に広がります。彼女はジト目であなただけを睨んでいました。その顔を見ると、あなたはどうしようもなく欲情してしまふのです。自らの妹に蔑まれ、見下されるといふ敗北感があなたのペニスを固くします。そして、妹に虐げられて勃起しているという事実に興奮し、さらにペニスを固くさせるのです。あなたは悦楽の渦に飲み込まれていきます。そのスパイラルから逃れる術は皆無でした。

あなたは口をもごもごさせながら返答に窮します。まさか、妹に虐められるという屈辱、敗北感に興奮しているから、と言えるはずがありません。まさか、妹の臭いに興奮しているから、と言えるはずがありません。あなたはどうかこの場を誤魔化しようと、要領の得ないことを繰り返すばかりです。

「……は？ なに言ってるの？ もしかして、お兄ちゃん、日本語通じない？ いい？ 日本語も分からない馬鹿なお兄ちゃんのためにもう一度言うよ？ お兄ちゃんは、どうして、こんな目に遭って、勃起をしているの？ 分かりますか？ わくわくりくまうすくわく？」

久留里の罵倒がああなたの心に突き刺さります。しかし、今のあなたにとってはそれすらもあなたの勃起を増長させる材料となるのです。胸を締め付けられるような苦しみに、あなたは息を荒らげます。背筋を指でなぞられるような快感が迸り、あなたはますます性欲の虜となります。

そんな様子のあなたを見て、久留里は口角をわずかに上げます。

「分かった。分かったよ。そんなに頑なに言いたくないんだったら、もうなにもしてあげないもんね。私、もう部屋に戻るから。独りでシコシコオナニーでもしてれば？ それじゃあね」

久留里はそう言って立ち上がり、リビングから立ち去ろうとします。あなたは慌ててあなたを引き止めます。

「……なに？ なんかよう？ 私、今から宿題やらないといけないんだけど」

久留里は心底迷惑そうな顔であなたを見ます。その表情に頬を蒸気させながら、あなたはとうとう告白します。自分が妹の臭い責めによって興奮してしまっただけということ、妹に虐められて勃起してしまっただけということ、あなたはその事実を久留里に告げます。そして、懇願します。自分をもっと虐めてほしいと、もっと臭いを嗅がせてほしいと、あなたは恥ずかしいお願いをします。

「……………そう、そっか」

久留里は踵を返すと、あなたの元へと帰ってきます。そして、あなたのお腹にどすんと腰を下ろすと、満面の笑みを浮かべました。

「はいよく言えました。やっぱりお兄ちゃん、変態野郎だったんだねっ」

久留里はあなたのペニスをズボンの上から押さえつけます。あなたは呻きながらその刺激に体を振らせません。

「……………ねえお兄ちゃん」と久留里があなたに囁きます。

「そろそろさ……………お互いの立場ってやつを明確にした方がいいと思うんだよね」

恍惚な表情をしながら久留里はあなたの頬を指でなぞります。まさに、生殺与奪といった感じ。あなたは支配されているという実感を覚えます。それはとても心地良いものでした。

「私にシコシコしてもらいたいんだったら、そうだなあ……………お兄ちゃん、これから私の言うことは絶対聞かなくて約束する？」

久留里はそう訊ねます。あなたは大きく頷きます。

「私の命令には絶対に従って、完璧な忠誠を誓うって約束する？」

久留里はそう訊ねます。あなたは大きく頷きます。何度も何度も頷きます。

「それじゃあ、お兄ちゃん。犬になりなさい？」

久留里はあなたに命令をします。あなたは思わず、え……………と声を漏らしてしまいました。

「『え……………？』じゃないでしょ？ 犬だったら、ちゃんと『ワン』って鳴きなさい。ほら、お兄ちゃん、『ワン』って鳴きなよ、『ワン』ってあなたはもうすでに久留里の奴隷です。あなたは彼女の命令に忠実に従います。あなたは犬の鳴き真似をします。ワン……………ワン……………ワン……………あなたは鳴きます。犬のようにワンワンと鳴きます。

「えらいえらい。それじゃあお望み通りに……………」

久留里はあなたのズボンと下着に手をかけ、両方を一息にずり下げてしまいました。あなたの勃起したペニスが姿を現します。

「うっわグッロ〜。先っぽから汁垂れてるし。しかも、ちよつと皮被ってんじゃん。お兄ちゃん、ドMで包茎なんだね。こりやもう二度と恋人なんかできないね。ずっと独り身だね。お兄ちゃんかわいそ〜」

久留里の言葉責めにあなたは悶えます。思わず、喘ぎ声を上げてしまいます。

「こら！ 何度言ったら分かるの！ お兄ちゃんは犬なの。何があつてもワンって鳴かなきゃいけないの。犬が『うう〜ん』なんて言う？ 言わないでしょ？」

久留里の執拗な叱責。あなたはワンワンと鳴いて、彼女のご機嫌をとります。

「よしよし。それでいいの。それじゃあご褒美にと……」

久留里は靴下に手をかけると、シウルシウルと脱ぎ捨ててしまいます。彼女の魅惑の素足が姿を現しました。あなたはごくりと唾を飲みます。

「生足のくっさあ〜い臭いを嗅がせながら、シコシコしてあげるね」
久留里はあなたの顔の前で素足をわきわきと動かします。指を閉じて、開いて、閉じて、開いて。焦らすように、お預けをするように、中々臭いを嗅がせようとはしません。

「ほらあ、私の生足だよ〜。とお〜つてもクサイ臭いがするよお〜。酸っぱくてえ、汗臭くてえ、お兄ちゃんにとっては最高の臭いになってるかなあ〜。ねえ嗅ぎたい？ 私のくっさい足、嗅ぎたい？」

久留里はあなたにそう訊ねます。あなたはワンワンと頻りに鳴いて、おねだりをします。もはや人としての尊厳すらも捨てています。あなたの行動原理はただ一つ。久留里に虐めてもらおうということだけでした。

「しょうがないなあ、お兄ちゃんは。それじゃあお望み通りに……うりやあ〜〜〜！」

可愛らしい掛け声と共に、久留里はあなたの顔面に生足を乗せました。あなたは貪るように彼女の足の臭いを嗅ぎます。まるで本物の犬のようです。

久留里の足の臭いは上履きや靴下を軽く凌駕するほど強烈でした。

むわあつと鼻に入り込み、凄まじい速度で脳みそを汚染させていきます。やはり、悪臭の根源ということもあり、その臭いは痛烈無比の一言です。えずいてしまうほどの不潔な汚臭です。足臭を頂点まで突き詰めたかのような足臭。こんな綺麗な足からどうしてこれほどまでの悪臭が放たれてしまうのか、それを考えることに意味はないでしょう。その臭いはあまりにキツすぎるというのに、あなたの鼻は止まりません。嗅いで嗅いで嗅いで嗅いで。あなたは妹の足の臭いを嗅ぎ続けるのです。

「それじゃあ、チンチンをシュツシュシチャいませうね〜」

久留里は足の臭いを嗅がせながらあなたのペニスを上下に扱き始めます。カウパー液に塗れたあなたのペニスはくちゆくちゆといやらしい音を奏でます。余った皮がペニスの裏筋を何度も舐り、断続的な快感をあなたの全身に巡らせませす。あなたのペニスは嬉しそうに痙攣し、涎をだらだらと垂らします。妹にこれほどまでに欲情してしまうとは、なんと情けないのでしょうか。

「うっわあ〜、きったなあ〜。お兄ちゃんのチンチン、汁でぐっちよぐちよになってるよ？ 妹に虐められてこんなに興奮しちゃうんだね。はずかし〜」

久留里はそう言いながら自分の素足をあなたの顔面に擦りつけます。彼女の足は汗でじとじとに湿っており、その臭いは時間が経つにつれさらに強烈な悪臭へと悪化していくのです。あなたはえずきながらも、涙を流しながらも、その臭いを嗅ぎます。久留里のくっさあ〜い足の臭いを嗅ぎ続けます。あなたにとって彼女の足の臭いとは、麻薬のようなものでした。あなたは狂ったように久留里の汚れた足の臭いを嗅ぐのです。

「ほら！ お兄ちゃんはワンちゃんなんだから、くんくん臭いを嗅ぐだけじゃなくて、ペロペロ舐めなくちゃ。お兄ちゃんは私のくっさくて汚あ〜い足を舐めなくちゃいけないの。分かるかな？ ほらほら、さっさと舐めなさい。汗とか垢とか、足の裏の汚れを綺麗にしなさい。これは命令だよ？ お兄ちゃんは私の言う通りにしなくちゃいけないの。ほら、は〜やく〜！」

久留里はあなたを急かします。あなたは戸惑うこともなく、言われた通りに彼女の足を舐めます。彼女の足の裏を舐めます。彼女の踵を舐めます。彼女の指を舐めます。彼女の指の間を舐めます。あなたは

彼女の足を隅から隅まで舐め尽くします。汗や垢やごみがあなたの口の中を不快な味で満たします。塩辛く、また、鉄のように苦く、あなたの舌はぴりぴりと拒絶反応を示します。その臭いからも歴然であるように彼女の足の裏の味は最悪でした。とてもではありませんが、舐められたようなものではありません。

しかし、それでもあなたは久留里の足を舐めます。あらゆる箇所に舌を這わせ、精一杯の奉仕をします。ぺろぺろ、ぴちゃぴちゃ。まるで泥に足を踏み入れたかのような、汚らしい音が部屋に響きます。あなたが彼女の足を舐める音です。

「やだあり、くすぐったありい。きやははははははっ」

久留里は無邪気に笑いながらその両足であなたの顔を蹂躪します。ぬちゃぬちゃ、ぬちゃぬちゃ、粘着質な音と共に、あなたの顔はあなたの自身の唾に塗れていきます。彼女の足の臭いはあなたの唾の臭いと混ざり合い、それはそれはひどい臭さとなっていました。こみ上げる嘔吐感を必死に抑えながら、あなたは奉仕活動に努めます。

「よしよし、よくできたね。それじゃ、ご褒美をあげようね」

久留里はそう言うと、あなたのペニスを扱くスピードをさらに上昇させます。剛健な竿を力強く握り、乱暴に振り回します。間断なき快感があなたの脳を犯し、全身を痙攣させながらあなたは絶頂への道を奔走します。精巢で大量生産された精液はずっしりとした重量感を持ちながら管を昇り始めました。どうやら、あなたの射精も時間の問題のようです。

「ほら、いいんだよ？ 出そうになったら出しちゃってもいいんだよ？ 私の手コキでピュッピュッピュッってしちゃいなさいよ。ほらあ、精子出ちやいそうなんでしょ？ 白白おしっこお漏らしたくないでしょ？ ねえい、久留里い、お兄ちゃんがくっささいザーメン飛ばすとこ見たいな。私の足の臭いでぐちゃぐちゃになりながら、ピュルピュルお漏らししちゃうところ見たいな。みくたういくなあ」

半笑いを浮かべながら久留里はあなたに射精を要求します。あなたのペニスは大きく痙攣し、その身を躍動させながら己の限界をあなたに伝えます。妹の言葉責めと足の臭いと手コキ、その快楽に耐えることなどできません。あなたは実の妹の目の前で、あまりに情けない射精をするのです。白濁色の液体をまき散らすのです。それはまさしく

奴隷の証。あなたはこの射精によって彼女に永遠の服従を誓うのです。「うわっ！ チンチン、すっごいビクビクしてる！ ほら、出しちゃえ出しちゃえ。妹の足の臭い嗅ぎながら、精子いっぱい出しちゃえ〜」

久留里の掛け声と共に
あなたは射精してしまいました。

びゅっびゅっうっうっ〜びるるるるっうっ〜どびゅっ
どびゅっ

あなたは腰を震わせながら龟头から大量の精液を噴射させます。噴水のように吐き出された精液は一メートルもの跳躍を見せた後、青臭い雨となって降り注ぎました。精液の雨は久留里を汚し、そして、自分自身をも汚しました。それはゼリーののような質感で、非常に濃厚な精液でした。前後不覚に陥るほどの強烈な快感があなたの全身を送り、目眩と微睡みが交差する中であなたは享樂に溺れていきます。為す術もなくあなたは本能のままに射精します。行き場のない遺伝子は無意味に散らすのです。

「うわっ！ 顔にかかった！ キモチワルッ！」

大量に噴射された精液は久留里の顔面にひっかかりました。獯猛な純白が彼女の柔肌を汚します。咄嗟に顔を背けたおかげでさほどの被害はありませんでしたが、もし、避けようとしなかったのなら、彼女の顔面は精液塗れになっていたことでしょう。それほどまでにあなたの射精は凄まじい勢いであったのです。

「うっわあゝ、手もヌルヌルになっちゃった。っっていうか……うえっ！ くっさ！ 精子くさ〜い！」

当然ながら、久留里の右手は大惨事になっており、あなたのねっとりした濃厚な精液で汚染されていました。彼女は興味本位でその右手を鼻に近づけて臭いを嗅ぐと、えづきながらも片方の手で鼻を摘みました。あなたの精液はもうすでに雄臭い異臭を放っており、それは久留里にとって嫌悪すべき臭いであったようです。

「もう！ 汚い！ お兄ちゃん、しっかりと掃除してよね」

久留里は生足を退けて、あなたに精液塗れの右手を差し出しました。その意図を即刻理解したあなたは彼女の手の平に舌を這わせ、己の精液を舐め始めました。精液は顔を顰めるほど苦く、飲み込む度に口の中に不快感を残しました。それでも、久留里の頼みとあれば、断るわけにもいきません。あなたは懇切丁寧に彼女の手にこびりついた精液を舐めます。射精の余韻に浸りながら、身も心も支配されているという感覚を享受するのです。

「……うん、多少はマシになったかな？」

久留里は精液を舐め取られた後の手を眺め、満足そうに言います。そして、接吻でもするのではないか、と思わせるほどにあなたの目の前に顔を寄せます。そして、囁くようにあなたに話しかけます。

「ねえ、どうだった？ お兄ちゃん、私の手コキ気持よかった？」

あなたは甘い吐息を漏らしながら何度も頷き、その素晴らしさをアピールします。久留里は実の兄を服従させたという達成感と、満たされていく支配欲求にご満悦の様子です。彼女は舌なめずりをしながら再びあなたに囁きます。

「そう、そんなに気持ちよかったんだ……。それじゃあさ……。もっと気持ちよくさせてあげるねっ」

久留里は小悪魔スマイルを見せると、間髪入れずにあなたの顔面に座り込んでしまいました。あなたの視界はピンク色の下着で完全に覆われてしまいます。あまりに突然のことにあなたは呻き声を上げながら苦しみます。

「どうう？ 私のお尻の匂い、いい匂いでしょ？ 嗅いで嗅いで……？」

久留里はあなたの顔面に肛門を擦りつけます。彼女の肛門は汗と糞尿の入り混じった強烈な臭いで、お世辞にもいい匂いとは呼べないものでした。さすがのあなたでもこれには耐えられません。あなたは彼女のお尻から顔を背けようと、右に左にもがきます。

「こら、逃げちゃだめ。ちゃんと臭いを嗅ぎなさい」

久留里はさらにお尻を強く押し付け、あなたの動きを相殺します。そして、射精してまだ間もないペニスに手を伸ばし、それを巧みに扱き始めました。

「ふふふん、この調子でもう一回お射精しちゃいましょうねっ」

久留里は赤子をあやすかのように話しかけると、精液でベタベタに

なったペニスを勃起させていきます。彼女の右手はまるで蛇のように絡みつき、亀頭を揉み、カリ首を撫で、裏筋をなぞります。射精したばかりだというのに、あなたのペニスはその身を肥大化させ、男らしい一物へと変貌していきます。あなたはもう完全に久留里の奴隷なのです。あなたが意識しようがしまいが、あなたの体は久留里の思うままに反応し、その恥態を披露してしまいます。鼻の曲がりそうな悪臭、窒息しそうなほどの息苦しさ、後頭部に広がる痛み。全てがこの地獄に拍車をかけ、あなたを徹底的に責め立てます。この状況で勃起するなど通常では考えられないことなのですが、あなたはその稀有なる存在でした。パブロフの犬よろしく、あなたは妹に虐められることによって強制的に勃起してしまうという難儀な体質になったのです。あなたはもう取り返しのつかない領域まで達してしまいました。あと戻りできません。

「な〜くん。ホントはちゃんと興奮しちゃってるじゃん。どお？ 気持ちいい？」

久留里は腰を前後に動かしながらあなたの顔面を汚します。お尻の臭いがあなたの鼻を冒し、先ほどの足臭と混ざり、尋常ではない激臭となっていました。ぐりぐり、ぐにぐに。息苦しくて堪りません。臭くて臭くて堪りません。

あなたのペニスは血管が浮き出るほどに勃起し、先走り汁を漏らし始めました。自身の精液と混ざり、粘っこい液体となったそれはあなたのペニスを優しく包み込み、さらなる快樂の奔流へとあなたを誘います。あなたは四肢を縮めたり、伸ばしたりしながらその快樂に悶えます。心臓が高らかに鳴り響いています。

「へへ〜くん、それじゃあこんな臭いはどうかな？……………んっ」

久留里は軽い力みます。すると――

ぶぶぶぶ〜！！

久留里のお尻から甲高い音が鳴り響きました。生温かい風が掠めると共に、あなたの鼻はとてつもない激臭を感じました。ニンニクを直接鼻に塗りたくられたかのような強烈な臭いです。下着越しであってもその悪臭は些かも遮断されることはなく、あなたの鼻に激臭の渦を

巻き起こします。あなたは鼻をふごごさせながら苦しみます。

「ごつめくくん、お兄ちゃん。オナラ出ちゃった。昨日、ニンニクラーメン食べちゃったからヤバイかも。でも、お兄ちゃんなら全然大丈夫だよな？ お兄ちゃんって変態だもんねえ」

そう、この臭いの正体とは久留里のオナラでした。彼女の放屁は女子のものとは思えないほど臭く、悲惨なまでの臭いを放っていました。肛門の臭いなどとは比べ物にならない臭いです。あなたは鼻を摘みたくて堪らなくなるのですが、彼女のお尻が顔を塞いでいるためどうしようもありません。あなたは鼻を席卷する猛臭をただひたすらに耐え抜くしかありませんでした。

そこに久留里が無情の一言。

「あつ、まだ出るくっつ！」

ぶっ
ぶっ
ぶっ
ぶっ
ぶっ

鮮やかなまでの三連発を決めると、久留里はその気持ちよさに身震いします。自分の兄の顔に跨がり、放屁を繰り返すという罪悪感、そして、征服感。○学生の彼女にとってはまさしく未体験の領域で、彼女は惚けながら悦に浸ります。性的興奮により、彼女の秘所は湿り気を帯びていました。

しかし、久留里がいくら気持ちよかろうと、あなたにとっては堪ったものではありません。先ほどの一発に続けての連続放屁。休む間もない激臭の連撃に、あなたの意識は朦朧とします。ニンニクの臭いはさらに濃厚となり、それに加えてオナラ独特の香りがぷくと臭います。平均的なオナラの臭いなどとうに超越しており、彼女の腸内環境を心配せざるを得ないほどでした。

「ほらほら、くっさいオナラこきながら、今度は足コキしちゃうよ。ぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐり」

久留里はあなたのペニスの側面に両足を当て、上下に擦り始めました。彼女の素足はまるで丹念に織り込まれた絹のようでああなたのペニスにぴったりとフィットし、快感のツボを巧みに刺激します。素足のひんやりした感触が脳に電撃を走らせ、カウパーがだくだくと溢れます。それと共に耐え難い射精感が湧き上がります。

「ほらあ、チンチンばっかに気を取られちゃだめだよ？」

ぶりりりいっ！ ボバフツッ！ ぶっびいいっ！

大便を漏らしたのではないか、と不安になるほどの下品な音色が発せられます。その音に似つかわしい臭いがあなたの鼻に届きます。ペニスの方に意識を向けていたあなたにとっては晴天の霹靂で、あなたは盛大に咳き込みながら苦しみます。今度のオナラは便臭がかなりキツく、酸っぱいものが込み上がるのをあなたは感じました。

「あははっ、お兄ちゃん苦しそ〜！ ってかくっさ！ お兄ちゃん、嗅ぎ漏らしちゃダメだよ？」

久留里は笑いながら鼻を摘み、辺りを仰ぎます。あなたの鼻から漏れたオナラは周囲に漂い、彼女の鼻を刺激したのです。あなたは彼女の言う通り、一片たりともオナラを嗅ぎ漏らさないように深呼吸を繰り返します。あなたは彼女の奴隷です。指示されたことは絶対に遂行しなくてはなりません。

「……………そろそろかな？」

久留里はぼそりと呟くと、足コキのスピードをさらに加速させます。彼女の予想通り、あなたはもうすでに射精寸前の状態でした。足コキのスピードアップによりその射精感もより上昇し、あなたのペニスは小刻みに痙攣します。

「やーん。お兄ちゃん、また出しちゃうの？ 私の足コキで出ちゃうの？」

久留里は息を荒げながらあなたを責めます。もちろん、返答など求めてはいません。それはほとんど独り言に近いものでした。

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ——あなたのペニスはいやらしい音を立てながら扱かれます。彼女の足の臭いとあなたのペニスの臭いはぐちゅぐちゅに混ざり合い、ひどい悪臭を醸し出していました。吐き気を催すほどの臭いでしたが、彼女はうっとりしながら漂ってくるその臭いを嗅いでいます。もはや、正気の沙汰ではありませんでした。

「ほら！ イケイケ！ 私の屁の臭い嗅ぎながら精液出しちゃえ！ どっぴゅんしちゃえ！ 妹の前で二度目の射精しちやいなよ！」

射精の兆候を示すように、あなたのペニスはピクリピクリと震えま

ました。そして、あなたを見下します。薄ら笑みを浮かべながら泰然と見下します。

「ふふ、これだけされて嬉しそうにしてるなんて。これでお兄ちゃんは奴隷決定だね。だってお兄ちゃんは今もう私の虜だもんね」

久留里は無邪気な笑顔をあなたに向けます。あなたの心臓はバクバクと高鳴ります。あなたは禁断のラインに侵入してしまいました。あなたは妹に恋をしてしまったのです。

「それじゃあ、私、これから宿題やるから。それが終わるまでに、この辺りを掃除して、んで、後、プリン買っておいでね。これは約束じゃないよ。命令だから。分かった？」

久留里は子供に言い聞かせるように話します。

あなたは力強く返事を返しました。